ひとつの火

新美南吉

わたしが子どもだったじぶん、わたしの家は、山のふもとの小さな村にありました。

わたしの家では、ちょうちんやろうそくを売っておりました。

ある晩（ばん）のこと、ひとりのうしかいが、わたしの家でちょうちんとろうそくを買いました。

「ぼうや、すまないが、ろうそくに火をともしてくれ。」

と、うしかいがわたしにいいました。

わたしはまだマッチをすったことがありませんでした。

そこで、おっかなびっくり、マッチの棒（ぼう）のはしの方

をもってすりました。すると、棒のさきに青い火がともりました。

わたしはその火をろうそくにうつしてやりました。

「や、ありがとう。」

といって、うしかいは、火のともったちょうちんを牛のよこはらのところにつるして、いってしまいました。

わたしはひとりになってから考えました。

――わたしのともしてやった火はどこまでゆくだろう。

あのうしかいは山の向こうの人だから、あの火も山をこえてゆくだろう。

山の中で、あのうしかいは、べつの村にゆくもうひとりの旅人にゆきあうかもしれない。

するとその旅人は、

「すみませんが、その火をちょっとかしてください。」

といって、うしかいの火をかりて、じぶんのちょうちんにうつすだろう。

そしてこの旅人は、よっぴて山道をあるいてゆくだろう。

すると、この旅人は、たいこやかねをもったおおぜいのひとびとにあうかもしれない。

その人たちは、

「わたしたちの村のひとりの子どもが、狐にばかされて村にかえってきません。それでわたしたちはさがしているのです。すみませんが、ちょっとちょうちんの火をかしてください。」

といって、旅人から火をかり、みんなのちょうちんにつけるだろう。長いちょうちんやまるいちょうちんにつけるだろう。

そしてこの人たちは、かねやたいこをならして、やまや谷をさがしてゆくだろう。

わたしはいまでも、あのときわたしがうしかいの

ちょうちんにともしてやった火が、つぎからつぎへうつされて、どこかにともっているのではないか、とおもいます。

底本：「ごんぎつね　新美南吉童話作品集1」てのり文庫、大日本図書
1988（昭和63）年7月8日第1刷発行
底本の親本：「校定　新美南吉全集」大日本図書
入力：めいこ
校正：もりみつじゅんじ
2002年12月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。